

# 古書のたのしみ（令和七年八月）

土屋 博

一「古今集遠鏡」一、二、三、五、六

（尾張書肆東壁堂）

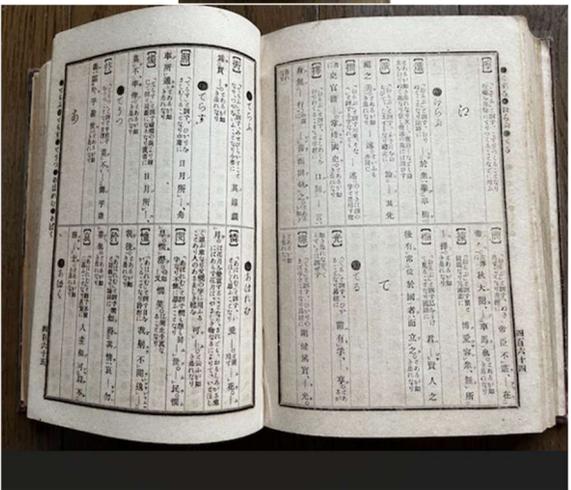
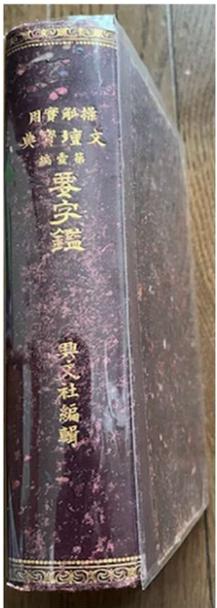
古書價格千圓也。復刻書は平凡社東洋文庫を始めとして幾種類も所有すれど、原典は初めての入手なり。第四卷缺なれど、本居宣長の直筆を眺むるは、格別の心地ぞする。



二「操觚實用 文壇寶典 要字鑑」興文社編輯

（興文社、明治二十五年刊、定價金壹圓、六三七頁）

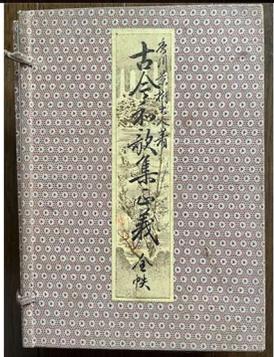
古書價格五百圓也。緒言に曰く、「要字鑑は、實に文壇必要の漢字の用法を詳述せるものなり。古來本邦學者の間に此の種の著録少からずと雖ども編次の方法宜しきを得ず」と。たとへば、「えらぶ」の場合、論語より「選」、唐書より「撰」、孝經より「擇」、書經より「簡」、三國志より「揀」の文例を掲ぐ。



三「古今和歌集正義 全帙」香川景樹大人著

(積善館、明治二十九年再販、定價金壹圓貳拾錢、

古書價格五百圓也。全四分冊。香川景樹(一七六八年生れ、一八四三年歿)、總論に曰く、「詩は志をいひ、歌は言を永くすといへり。古より此歌の字をうたとよませて大和歌にあてたるは、もと皇國のうたも謠ひて言を永くするものなればなるべし」と。



四「繪本 日本外史」(第一冊より第十一冊まで) 頼山陽原著、大町桂月譯述

(博文館、大正九年再販、各正價金壹圓貳拾錢)

古書價格、纏めて僅かに千圓なりき。初版は大正七年。全十二冊のうち、第十二冊のみ缺なれど、以前購入したるものに比して書籍の状態遙かによし。本シリーズ、日本外史を學ばんとする現代人にとりては、必須の名著といふべし。ただし、桂月も冒頭に斷りを述べたる如く、山陽の論文はすべて省かれたり。桂月曰く、「山陽の精神は此の論文に於て發揮されて居るが、それは漢文で讀んでこそ妙味もあれ、現代の言葉に直すと却つて山陽の文章を傷つ

ける恐れがあるから、本書には總て論文を省くこととした」とぞ。



五「南洲先生手抄言志録管窺」

(小松弘之私家出版、昭和八年刊、非賣品、一三二頁)

古書價格五百圓也。帙入和綴。佐藤一斎(一七七二年生れ、一八五九年歿)の「言志録」は西郷隆盛(一八二八年生れ、一八七七年歿)の愛讀書なり。「管窺」は、少しく見る。管の中より天をうかがふ義なり。序文に曰く、「本書は、西郷先生が言志録中より尤も會心の言、一百一章を抄録され、自己の座右銘とされ、且つ、時々私學校の生徒に訓講せられしところのものなり」と。第一章「游惰を認めて以て寛裕とする勿れ」より第一百一章「身には老少ありて、而して心には老少なし」まで。

3

六「萬葉集小徑」土屋文明著

(三學書房、昭和十七年五版、定價貳圓、三三〇頁)

古書價格五百圓也。初版は昭和十六年。土屋文明(一八九〇年生れ、一九九〇年歿)は、東大哲學科卒、歌誌「アララギ」の編輯に參畫。明治大學教授、宮中歌會撰者を経て文化勲章受章。凡例によらば、本書は「萬葉集名歌評釋」(非凡閣、昭和九年刊)に昭和十年雜誌「アララギ」連載の「萬葉集百首選」を加へたる内容の由。たとへば、「額田王の作(あかねさす)の方」に多くの姿態の見えることは嫌みとまでは言はないとしても、大海人皇子の御歌(紫草の)の勁直眞率なるのには遠く及ばないやうに思ふ」と。

七「花の萬葉集」監修犬養孝、寫眞・文 大貫茂

(グラフィック社、昭和六十年刊、定價二千五百圓、本文三一九頁)

古書價格六百七十八圓也。萬葉集四千五百十六首のうち、植物の讀み込まれるものは約千七百首にのぼる由。大貫茂(一九三三年生れ)は、山と溪谷社を経てフリーランスの寫眞紀行作家。犬養孝(一九〇七年生れ、一九九八年歿)は、東京の谷中に生れ、熊本の五高を経て

東京帝大國文科卒。大阪大學名譽教授。萬葉學者として昭和天皇にご進講せらる。犬養博士の「萬葉の花」によらば、萬葉にては梅百二十首に對し櫻は四十首ほどの由。山上憶良の秋の七草の歌は、七つの植物名を並べたるのみにて自ら愉しき秋の情趣の感じらるるのも妙なりとす。「萩の花尾花葛花なでしこの花をみなえしまた藤袴朝顔の花」

八「花の源氏物語」監修村山リウ、寫眞・文大貫茂

(グラフィック社、昭和六十一年刊、定價二千五百圓、本文二四一頁)

古書價格四百五十圓也。村山リウ(一九〇三年生れ、一九九四年歿)は源氏物語の語り部ともいふべき存在なりき。源氏物語の中には、花も春夏秋冬を競ひ合ひ、女主人公の名前もほとんどが花の名前を付けられたる由。

九「わが人生 阿蘇の噴煙」犬養孝著

(大阪市民大學センター、昭和六十三年刊、定價千八百圓、二五三頁)

古書價格四百圓也。昭和四年一月十二日の阿蘇の四拾年振りの大爆發の際に外輪山の頂上に立ち噴火口の中の溶岩の煮えたぎるさまを見た経験がその後の自身の活動の原動力となりたる由。ベストセラー「萬葉の旅」については、自分には子供が居らぬ故、惜しげも無く全部旅費に注ぎ込む事の出來たる由。

十「別冊太陽 犬養孝と萬葉を歩く」全國萬葉協会編

(平凡社、二〇〇一年刊、定價本体二千二百圓、一六〇頁)

古書價格千圓也。平成十二年に自宅より發見せられたる「萬葉の旅」(現代教養文庫三冊)取材ノートの寫眞は極めて貴重なり。

十一「和歌を歌う 歌會始と和歌披講」日本文化財團編、披講會協力

(笠間書院、二〇〇五年刊、本體定價二千八百圓)

古書價格千四百九十圓。CDブックの収録内容は、君が代、古今集・新古今集などより春の歌七首、平成十六年度歌會始の歌。坊城會長ほか披講會の協力による貴重なる録音なり。

(令和七年九月十一日受附)